周作人『随筆記録』——未公表文集（上）

中島長文　釈文・訳注

はしがき

ここに掲げた十五篇の文章は『随筆記録』と題され、周作人自身の手になるまとまった文集としてはおそらく最後の、絶筆と称してもよい。わたしは、一九八二年の春先だったか、あるいは翌々年の夏であったか、記憶はもう曖昧なのだが、周作人の長男である周豊一さんからこの書を託された。わざわざわたしたちの宿舎であった北京の友誼賓館を訪ねてこられ、これを記念に差し上げますと言われた。見るとなんと周作人の直筆、それも一冊のノートに綴じられた原稿の束ではないか。その中身がどんなものかを確かめるまでもなく、わたしは即座にこんな大切なものは受け取れないと断った。しかし周豊一さんも考慮の末にそう言われたのであろう。しばし主客の間にやり取りがあっての後に、結局わたしがそれではお預かりしますということで受け取った。改革開放政策が進んで、ちょうどそのころは文革期に右派や実権派と称された人々の家から没収した（これを抄家（チャオジア）と称してめぼしい物証をかっさらっていく、家宅捜索をいう）文物の返還が始まっていた。これもその一環として周家に帰ってきたうちの一つだろうと思われた。周豊一さんはおそらく改革開放といっても、何時中央の方針が変わってまた抄家の難に合わぬとも限らない、ましてや自分のところは漢奸というお墨付きの家だ、そんなことが又起こるといよいよ災難の種になりかねない、それくらいなら手許にない方がましだ。わたしは豊一さんの決心の背後にそんな事情を想定した。

帰国したわたしは、すぐにそれをコピーし、また写真に撮った。公表について豊一さんはもちろん何もおっしゃらなかった。だがこうしたものはいずれ公表しなければならないが、その時期が問題だ。著者はとうに没しているが、係累の人に何かのとばっちりが行くようではいけない。わたしは最初の印象に拘り過ぎたのかもしれない。やがて改革開放の波に乗って過去の文学者の再評価も行われるようになり、周作人の著作もその中に入ったようであった。一九八七年には鍾叔河氏編で湖南の岳麓書社から周作人の既刊の文集が続々と復刊され、いわゆる周作人ブームに火が付いた。もう公表してもよいだろうと思ってその用意をするために現物を取り出そうとして探したが、なかなか見つからない。そこへ一九八九年の事件である。中国の方向はどうもよい方に行きそうにはなかった。しかしそんなことより肝腎の現物が行方不明になったのではどうしようもない。方々探しに探してコピーは出てきたのだが、いっしょに保管していると思っていた現物が見当

たらない。やがて一九九七年には周豊一さんが逝去されてしまい、翌一九九八年には『周作人文類編』全十冊が出た。もう公表しても何の差しさわりもないだろうと思ったが、現物が出てきてからにしようと思っていた。しかし人生はこの事だけではなく、さまざまな憂患が出で来たり、あっという間にこの歳になってしまった。お預かりしますと言って持ち帰ったのに、それが行方不明では全く申し訳が立たないし、面目丸つぶれである。申し訳が立たず、面目が丸つぶれだとしても、この際かまってはいられない。そこでやむなく出てきたコピーによって公表紹介することにした。

『随筆記録』と題するこの原稿は、全部で十五篇の随筆からなる。一九六五年四月十七日の題記から始まって、翌一九六六年八月十五日に終わっている。記された用紙は、誕生祝の文章を書くための縦長のもので、見ての通り上海朶雲軒制、現物は経年のせいか薄茶色を呈していた。そこに朱で横六格、縦二十八格の罫線が引いてある。それを二つ折りにして表面は十三行、裏面は十四行にとり、右端を二か所で綴じて記帳としてある。たて十六・二センチ、よこ十八・三センチ。行は罫線のとおりだが、一行の字数は不同。全二十五張、四十八面。表紙は黒っぽく柔らかい厚紙で、原稿用紙よりも少し大きい。表面にはかろうじて「随筆記録　一九六五年」と読める文字が記してある。題記が文頭に在り、以後各篇が順次に続けて書き加えられていること、各篇にそれほど多くの訂正がないことから推して、あらかじめ下敷きにする原稿があって、それによってこの〝原稿用紙〟に清書されたものと思われる。そして最後の文章の後にも、余分の用紙が付いていないから、清書した原稿用紙を集めて最後に製本されたのであろう。彼の死を去ること十か月、時期が時期であったのでおそらくこの原稿が本になるなどとは彼自身思わなかったろう。

ここに収録された文章も例によって人をそらさない、いかにも手練れのそれであるには違いないが、全体の印象ではやはり使い古した題材も多く、強弩の末といった感は免れ得ない。この中で面白いのは孫伏園の軼事を書いた「孫伏園」である（次号掲載予定）。民国の有名人の割にはあまり知られていない孫伏園について、周作人ならではのエピソードがいろいろと出てくる。もう一つわたしの注意を引いたのは、「越縵の文」である（これも次号掲載予定）。「越縵の日記」でも言葉遣いのうまさについて書いているが、頭を振り振り古典を叩き込まれた年代の人の文章感覚とはやはりこういうものかと思わせるところがある。〝可誦処〟とは結局体が覚えたリズムであり、彼自身は四六駢儷体と古文とがうまく合わさったところだと言う。五四の文学革命で新詩を提唱し、中国の詩に全く新しいリズムを導き入れようとした人の言にして、終にはそこに行くのかという感慨は消し難いものがある。古典文の終極の形が四六文であったわけだから、当時の知識人の文章感覚がよしとするところがそこであっても当然と言えば当然だろう。もっとも彼はべつに新詩を否定はしていない。彼自身はその詩作からずいぶん早くに足は洗ったのだけれども。そしてこれからの若い中国人が必ずしもそうなるとは限らないだろうけれども。越縵堂李慈銘

は思想的にも文学的にも周作人とは正反対の人物であったはずだが、ともかく周作人がこの故郷の先輩にしばしば言及するのは面白い事である。

もう一篇「徐訏への手紙」は、周作人の没後、香港の雑誌『筆端』に載ったものとわずかな語句の違いがあるほかはほとんど違わない。『筆端』誌所載のものは後に黄開発氏によって『周作人書信』（華夏出版社一九九四年）に収録された。日本では小山三郎、鮑耀明両氏の監修になる『魯迅――海外の中国人研究者が語った人間像』（明石書店二〇一一年）に山下未奈氏の手で周作人の手紙の現物から翻訳紹介されている。その手紙の写真も載せられているが、おそらく二葉のうちの前半であろう。縮印の関係で文字が細かくて読みにくい。なおついでに言えば、この書には周作人が言及する徐訏の周作人評、香港の雑誌『展望』に載った文章「知堂老人的回憶録（外一章）」も日本語に訳されている。この手紙の文末に公表は差し控えてほしいとあるけれども、この『随筆記録』の体裁からすれば明らかに公表を予定する（できるかどうかは別として）ものとして書かれている。したがって徐訏への「手紙」の「公表を差し控える」もむしろ「公表差支えなし」と読むべきものであろう。そうした読みの通り徐訏は周作人没後であったが早々と公表した。内容は読んで字のごとく北京を脱出して南下しなかった基本的な理由は自分の家族主義が本当の理由であったとする。これは大筋ですでに一九三七年の陶亢徳あての手紙に述べられた事とそれほど違わない。南下できなかったことと対日協力は直接の関係はないとはいうものの一つの大きな要素であったことは否めない。したがって百年後の者でなくとも、一九三七年の読者は彼が「弁解はしない」と胸を張ったけれどもすでに弁解しているではないかという疑問を持ったのではないか。このあたりのことについてはすでに木山英雄氏の『周作人「対日協力」の顛末』第三章「北京残留」（岩波書店二〇〇四年）にすでに論及がある。

『随筆記録』にはこの「手紙」のほかにすでに知られているものに「京戯」がある。これは部分的に周豊一さんの「憶往二三事」の「故友濱一衛氏の軼事一二」（本誌第十九号）に公表されている。本誌の古い読者ならあるいはひょっとして記憶の片隅にあるかもしれない。徐訏への手紙とともに「未公表」の一言に一言。

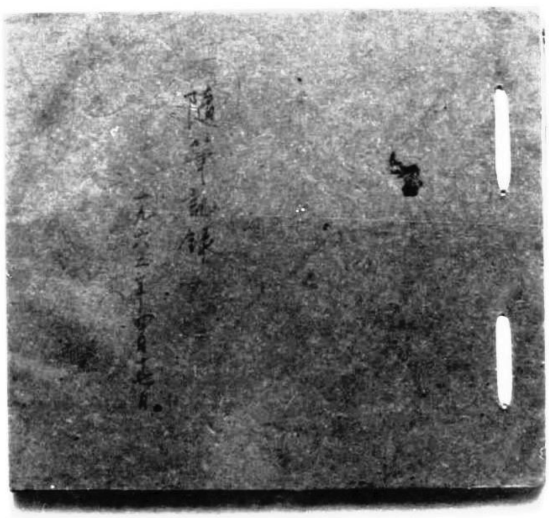
わたしは周作人の原稿、あるいはその複刻をそれほど読んだことがない。したがって文中多くの箇所で釈文を誤っているのではないかと思う。どうか忌憚なく教示されんことを願ってやまない。

二〇二三年十二月二十四日。

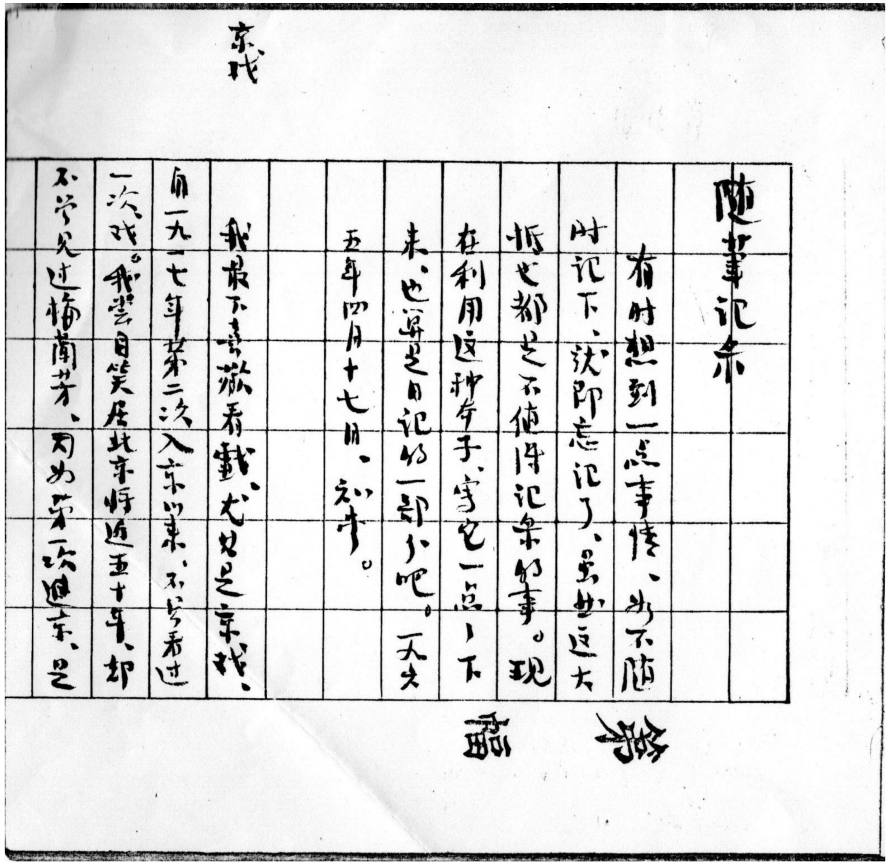
周作人未公表散文『随笔记录』

目次

京戏放翁诗
猫叫春
十三旦
兼好法师
越縵日记
又
消遣
致徐訏书
北沟沿通信
孙伏园
陶望潮
越縵文
春风谐诗
秋虫



表紙写真　「随筆記録　一九六五年四月十七日。」と読める



京戏

随筆记录

有时想到一点事情，如不随时记下，就即忘记了，虽然这大抵也都是不值得记录的事。现在利用这种本子，写它一点一下来，也算是日记的一部分吧。一天大五年四月十七日，初步。

我最下喜欢看戏，尤其是京戏，自一九一七年第二次入京以来，不妨看过一次戏。我尝自笑居北京将近五十年，却不曾见过梅蘭芳，因为第一次进京，是

随笔记录

有时想到一点事情，如不随时记下，就即忘记了，虽然这大抵也都是不值得记录的事。现在利用这种本子，写它一点点下来，也算是日记的一部分吧。一九六五年四月十七日，知堂。

随筆記録

時に何かを思いつくが、その時々に書いておかなければ、すぐ忘れてしまう、それらはたいていが記録するにも値しない事なのだけれども。いまこのノートを利用してそういう事を少しずつ書いておくのも、日記の一部にはなるだろう。一九六五年四月十七日、知堂。

京戏

我最不喜欢看戏，尤其是京戏，自一九一七年第二次入京以来，不只看过一次戏。我尝自笑居北京将近五十年，却不曾见过梅兰芳，因为第一次进京，是

京劇

わたしは芝居見物が特に嫌いだ、別けても京劇は。一九一七年二度目に上京してからは、一度しか見たことがない。自分でも五十年近く北京にいながら、一度も梅蘭芳を見たことがないと笑ったことがある、最初に北京に来たのは、

是光洋乙巳（一九〇五）年，当时学同友人柯
采卿俞榆好看过戏次戏，见到小叫天
朱素雲等，其时榆还没有双台，随小
就没有進过戏园了。所以仿佛馬用
似的，竟年机会见到活的梅蘭芳，正
是在实报的安会上见过程砚秋一回，这
是在一九三九年的事情。东戏的鑼鼓已经
很是吵闹，那老牛的力竭声嘶的叫喊，大
其不可耐，玩弄戊午（其实只是一个，因为
这么是阿字罢了）韵母拉开了唱，难道
这就是徐音使果了麼。鲁迅每说：
阿々的叫喊，哮々（越语，音如火烤々烤）
两个呆神巴掌，呆神巴掌者谓给呆
子打的耳光，替他行走呆神井也。叫侍

上海杂雲軒製

大壽文格式回

是光绪乙巳（一九〇五年），当时曾同友人柯采卿俞榆孙看过几次戏，见到小叫天朱素云等，其时梅还没有登台，随后就没有进过戏园了。所以仿佛马周〔1〕似的，竟无机会见到活的梅兰芳，虽然在实报〔2〕的宴会上见过程砚秋一回，这是在一九三九年的事情。京戏的锣鼓已经很是吵闹，那老生的力竭声撕的叫喊，尤其不可耐，玩弄几个（其实只是一个，因为这多是阿字罢了，）韵母拉长了唱，难道这就是余音绕梁了麽。鲁迅每说：阿阿的叫喊，嗟嗟（越语，音如火燵之燵〔3〕）两个呆神巴掌。呆神巴掌者谓给呆子打的耳光，替他赶走呆神者也。此语

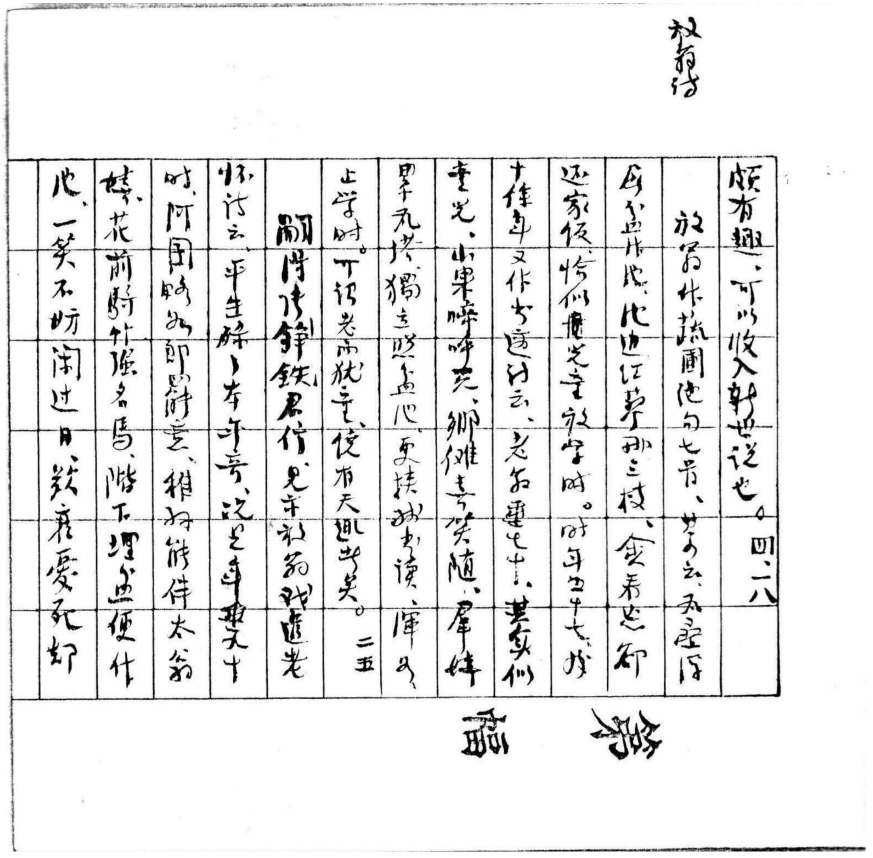
光緒乙巳（一九〇五年）に、当時は友人の柯采卿や兪兪孫たちと一緒に何度か見たことがあるが、小叫天、朱素雲たちを見ただけで、その時は梅蘭芳はまだ舞台に上がっていず、それからはもう芝居小屋には行かなかったからである。それでまるで馬周〔1〕のように、ついに生きた梅蘭芳にお目にかかる機会はないのである、『実報』〔2〕の宴会で、程硯秋には一度会ったことはあるけれども。それは一九三九年の事である。京劇の銅鑼や太鼓はそれだけでもうとてもやかましいのに、あの老生〔立役〕の声も涸れよとばかりの叫喚は別けても聞くに堪えない、いくつかの音（実は一つだけ、多くは〝あ〟の字に過ぎないから）をひねくり回して、母音を長ーく引っ張って歌うのである、まさかこれが余韻梁を繞るというわけではあるまい。魯迅はいつも言った、あーあーという叫喚、ばしっばしっと（嗟嗟は越の言葉、音は火燵の燵の如し〔3〕）二発アホ神へのびんたと。アホ神へのびんたというのは、アホにびんたを食らわせて、アホからアホ神を追い出してやるのである。この言葉は

【注】

（1）馬周　この二字を「馬周」と読んだ。ただ馬周は唐の太宗の名臣で、貧困から身を起こして大臣にまでなった人で、その出世物語は後に小説や戯曲にまでなったのであるが、馬周が生きた誰それに終に会う機会がなかったという説話はないようである。馮夢龍の『古今小説』第五巻にも出ない。博雅の教えを俟つ。

（2）『実報』　当時北平の大衆新聞。そのころ周作人はこの新聞に後に『苦竹雑記』や『書房一角』に収められる随筆を掲載していた。

（3）越語の「嗟嗟」は「阿阿」という芝居の発声に対して、二度のビンタの音を表す。「嗟嗟」は「燵燵」と音が同じ。越語「火燵」は「火着」で失火、火事のことだろうと思われるが、ここはその音を借りた。



颇有趣，可以收入新世说也。四，一八

すこぶる面白く、「新世説」に入れる資格がある。四月十八日

放翁诗

放翁作蔬圃绝句七首，其四云，瓦叠浮屠盆作池、池边红蓼两三枝，贪看忘却还家饭，恰似儿童放学时。时年五十七，后十余年又作书适诗云，老翁垂七十，其实似童儿，山果啼呼觅，乡傩喜笑随，群嬉累瓦塔，独立照盆池，更挟残书读，浑如上学时。可谓老而犹童，饶有天趣者矣。四 二五

嗣得張铮铁君信，见示放翁戏遣老怀诗云，平生碌碌本无奇，况是年垂九十时，阿囝略如郎罷意〔一〕，稚孙能伴太翁嬉，花前骑竹强名马，阶下埋盆便作池，一笑不妨闲过日，歎衰憂死却

陸放翁の詩

放翁は「蔬圃（やさいばたけ）」絶句七首を作った、その四首目に言う、

瓦を重ねて塔となし盥を池とする、池の端には赤い蓼が二三本、

それに見とれて家に帰って飯にするのも忘れた、まるで学童が放課後になった時のようだ。

時に彼は年五十七、後十余年又「快適を記す（書適二首の一）」という詩を作って言う、

老翁はいよいよ七十だが、まるで子どものよう。

山の果物だと大声で求め、土地の追儺にはにこにことついて歩く。

子どもらといっしょに瓦の塔を作り、ひとり立って盥の池に映してみる。

さらに脇に手挟んだぼろぼろの本を読む、それはまったく学校に上がる時そっくり。

老いてなお童の如く、天趣豊かな者と言える。四月二十五日。

ついで張錚鉄君からの手紙を得て、放翁の戯れに老いたる想いを遣るという詩〔戯遣老懐詩〕を示された、その詩に言う、

平生から碌々として何の変哲もない、ましてや年ももう九十だ、

息子はどうやら郎の職を辞める気らしい〔一〕、幼い孫は爺さんの供をして遊んでくれる、

花の前で竹馬に乗って名馬だという、階段の下に盥を埋めて池とする、

笑いながら長閑に一日を過ごしても構うまい、衰えや死を嘆き憂えるのは

【注】

（1）「郎罷意」　『剣南詩稿』等では「郎罷老」に作る。

猫叫春上 朱雲軒製

成癖。所据乃是四部叢刊縮印烏程刘氏藏明弘治選本，讨前不数年月，但据年垂九十之句，知讨作或在八十三回見甲春之八十三冷之後乎。讨中所说虽是稚好情事，但又题提起公西他，可也以想見他自己对於此事之爱好了，此又在书遍讨後有十年里，的确夠得上说虽老而童心猶在矣。五、三、

表明和尚作牛山七十屁之一云，蓉叫猫光猫叫春，听他越叫越精神，老伴也有猫光意，不敢人前叫一声。日本俳人且定为季题了一，曰猫的恋爱，列入春季，因为时也立春前後，虽然秋季还有一次，却不多立题月了。小孩则称之为猫打

尺書文格式圖

成痴。所据乃是四部丛刊缩印乌程刘氏藏明弘治选本〔2〕，诗前不系年月，但据年垂九十之句，则诗作或在八十三回见早春之八十三吟之后乎〔3〕。诗中所说虽是稚孙情事，但又提起盆池，可也以想见他自己对于此事之爱好了，此又在书适诗后约有二十年，的确够得上说虽老而童心犹在矣。五，三，

バカだ。

拠ったのは四部叢刊の烏程劉氏蔵明弘治選本〔2〕の縮印で、詩の前に詩作年月が書いてないが〝年九旬に垂とする〟という句に拠れば、詩作はあるいは〝八十三回早春を見る〟の「八十三吟」の後だろうか〔3〕。詩中に述べることは幼い孫の事だけれども、又もや盥の池を持ち出しているところを見れば、彼自身こういう事が好きだったと思いやられる、これもまた「書適の詩」の後約二十年であったのだから、確かに老いたりと雖も童心はなおあったと言えるだろう。五月三日。

【注】

(2)四部叢刊縮印烏程劉氏藏明弘治選本　『精選陸放翁詩集』。この詩は同書の別集にあり、その直前に「八十三吟」があり、更に前に「書適」がある。「蔬圃」はこれには収めない。『剣南詩稿』巻十三「蔬圃絶句」の内。

(3)「戯遣老懐」詩の作詩時期　銭仲聯の『剣南詩稿校注』ではこの詩を開禧元年（一二〇五）とし、「八十三吟」を開禧三年（一二〇七）とする。したがってそれによれば周作人の推測は間違いで、逆になるが、ただし校注は何によるのか根拠は示さない。

猫叫春

志明和尚作牛山七十屁〔1〕之一云，春叫猫儿猫叫春，听他越叫越精神，老僧也有猫儿意，不敢人前叫一声。日本俳人且定为季题之一，曰猫的恋爱，列入春季，因为时在立春前后，虽然秋季还有一次，却不另立题目了。小孩则称之为猫打

猫は春を啼く

志明和尚が作った「牛山七十屁」〔1〕の一つに言う、

春は猫を啼かせ猫は春を啼く、啼けば啼くほどいよいよ元気。

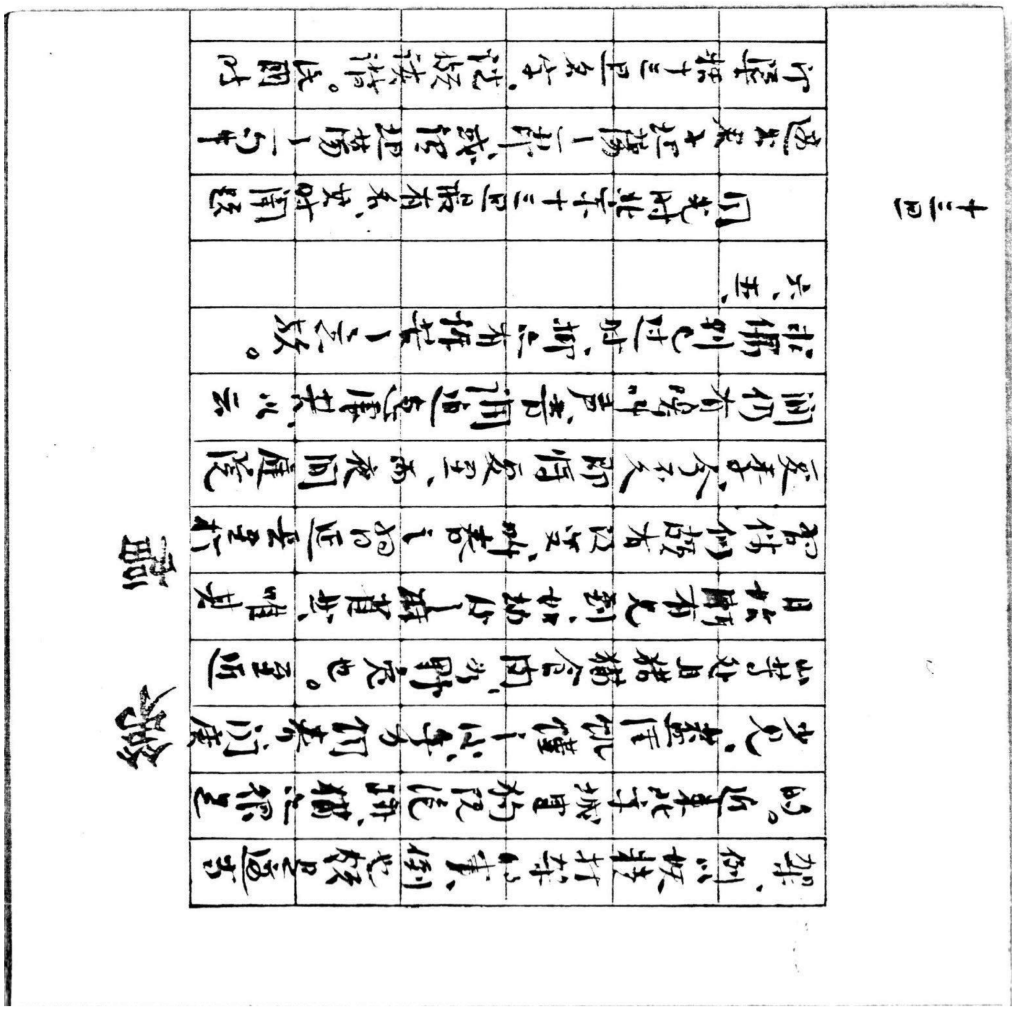
老僧も猫の気持ちがあるけれど、人前では一声も啼きませぬ。

日本の俳人は季題の一つと決めてさえいて、猫の恋と言い、春の部に入れている。時は立春の前後であるからだが、秋にももう一度あるけれども、別に題としては立てない。子どもはこれを猫の

【注】

(1)牛山七十屁　南京牛山の僧、志明和尚、明末清初の人で、人物社会を批評したざれ歌打油詩四十首を作った。それを『牛山四十屁』と言う。周作人はこの詩を喧伝し、自分でもそれに倣った詩

を作って牛山体と称した。詩集は生前には刊本とならなかったようで、石成金の日用百貨辞書『伝家宝』の中に三十首ばかりが保存されている。周作人がここで「牛山七十屈」としたのは何によるのか分からない。



架，例以妖精打架的事(2)，倒也颇是适当的。近来北京城里狗既绝迹，猫亦很是少见，盖经饥馑(3)之后，无力饲养，闻唐山(4)等处且猎猫食肉，如野兔也。至近日始渐有见到，如劫后之麻雀然，唯其习俗颇有改变，叫春之习延长至于夏季，今不久即将夏至，而夜间庭院间仍有嚎叫声，音调迫急凄苦，以云求偶则已过时，抑亦有诉苦之意欤。六，五，

ケンカという、妖精のケンカの事(2)を以て例えるなら、すこぶる適切である。近ごろ北京の城内では犬が姿を消したうえに、猫もめったに見ない。けだし飢饉(3)を経た後では、飼う力がないのだろう。唐山(4)あたりでは猫を狩って肉を食うという話である、まるで野ウサギである。近日になってようやく見ることがあるが、災禍の後の雀同然である、ただその習俗が随分変わったようで、春に啼く習いが夏にまで延びて、今は間もなく夏至だというのに、夜の庭では相変わらずわめき声がする、音調は切迫凄惨で、相手を求めるにしてはもう時期が過ぎている、あるいは苦しみを訴える意味がこもっているのであろうか。六月五日。

【注】

(2)妖精のケンカ　周作人たちは子どものころ枕絵を見て妖精のケンカだと思ったという話がある。

(3)飢饉　一九五八年にはじまる大躍進運動の結果、農村部の疲弊を招き一五〇〇万人から数千万に至る人が飢饉で死亡したと言われる。以下の文は志明に倣って動物の生理周期さえ狂わせるような飢饉を持ち出して暗にその事を非難したものか。

(4)唐山　いちおう「唐山」と読んだ。「唐」の字は「庚」の字のようにも読めるが、北京周辺にそんな山はないようで、この字が読めない。博雅の教えを俟つ。

十三旦

同光时北京十三旦(1)最有名，其时闱题迹书君子坦荡荡一节(2)或谓坦荡荡一句中即隐括十三旦名字，说颇诙谐。民国时

十三旦

同治光緒年間の北京では十三旦(1)が最も有名で、そのころ芝居小屋の入り口の題字には君子坦として蕩蕩たりという一節(2)が書かれていた、ある人は坦として蕩蕩たりという一句には十三旦の名前が隠されているのだと言ったが、その説はなかなか面白い。民国のころ、

【注】

(1)十三旦　京劇の女形、侯俊山の芸名。

(2)君子坦として蕩蕩　『論語』述而篇に出る文句。〝小人長く寂々たり〟と対になる。「坦」字は分解すれば「十一旦(dan)」となる、それに「蕩蕩(dangdang、dan とは近似音)」の二字を加えれば「十三旦」になるという文字遊び。

鴻麟閣子鴻庸因爾離婚、延江庸爲
律師、振亭值得一時、或出對曰鴻江二庸、
年姓之巧合者。以十三旦之例、陳垣亦爲十
二旦、外加八旦、別成二十、故或可對曰陳垣廿
旦、可以敷衍、唯不免唐突陳公耳。陳援
庵以漢奸起家、任輔仁大學、成政師大、實
校長二十餘年、任所非常派、國民黨、日本
人以至解放、屹立不動、近且加入共產黨、
並有榮譽矣。援庵與胡適之兩同住宋
耀庫、蓋年甚距席隨遠、而後學者相
得、又同好作治學、常對家人云互相訪問、
而記庫至八大胡同、必得出兩家相見、遂
各花甚、乃始驗怪、而秘密遂發覺、一
時傳以爲笑云。 六十六

冯麟阁（3）之子冯庸因闹离婚，延江庸为律师，报上喧传一时，或出对曰冯江二庸，无姓名巧合者。以十三旦之例，陈垣（4）应为十二旦，外加八旦则成二十，故或可对曰陈王廿旦，可以敷衍，唯不免唐突陈公耳。陈援庵以议员起家，任辅仁大学，后改师大，办校长二十余年，经历北洋派，国民党，日本人，以至解放，屹立不动，近且加入共产党，盖有荣誉矣。援庵与胡适之曾同住米粮库，虽年岁距离颇远，而谈学甚相得，又同好作冶游，常对家人云互相访问，而驱车至八大胡同（5），后偶然两家相见，惑各茫然（6），乃始骇怪，而秘密遂发觉，一时传以为咲云。六，二十二，

馮麟閣（3）の息子の馮庸が離婚騒ぎを起こしたので、江庸を弁護士として招いた、新聞ではひと頃喧伝して、あるものは対にして馮江二庸と言ったが、姓と名がぴったりと合うものはない。十三旦の例をもってすれば、陳垣（4）はさしずめ十二旦となり、ほかに八旦を加えれば二十となる、だから対にして陳王廿旦と言えないこともないが、ただ陳公には失敬なことになるのは免れない。陳援庵は国会議員から身を起こして、輔仁大学に任じ、後北京師範大学と換わったが、校長をやること二十余年、北洋派、国民党、日本人を経て、解放に至るまで、屹立して動ぜず、近くはまた共産党に加入、けだし栄誉あるものであろう。援庵と胡適之とはかつてともに米糧庫に住んだことがある、年齢はずいぶんと離れていたけれども、学問を語ってはなはだ話が合ったし、またともに冶游をするのが好きで、いつも家人にはお互い訪問し合うのだと言っては、車を駆って八大胡同（5）へ行った、その後偶然両家の者が出逢って、それぞれ何のことやら分からなかったが（6）、やがて驚き怪しみ、かくて秘密は発覚して、一時は笑い話として伝わった。六月二十二日。

【注】

（3）馮麟閣　またの名徳麟。奉天つまり瀋陽の匪賊の頭目。息子の馮庸は張学良と親交があり、教育者として東北の抗日運動の一つの拠点となった馮庸大学を起こした。字は漢卿。

（4）陳垣　字は援庵。一八八〇～一九七一。民国の大歴史学者。陳垣の「垣」の字は分解すれば「十二旦」となる。「陳王廿旦」というのは陳垣の十二旦に「王八旦」つまり王八蛋（バカ、人を罵る言葉。王八はコキュを言う。）を加えると「二十旦」になる。陳垣に対しては実に不敬な話であるが、何かそれに関する逸話があるのかどうか未詳。この文は実は陳垣についての逸話を紹介するためだけのものであるのに、妙に導入部に手が込んでいる。そしてこの王八蛋は後の笑い話である遊郭通いと対応させたのであろうか。二人の有名な学者の遊郭通いは当時の挿話たるに十分だが、陳垣に対する扱いとしては、何か含むところがあるような感じもし、ともかくすぐには腑に落ちないところである。

（5）八大胡同　旧時北京前門外にあった遊郭。

（6）「惑」　こう読んだものの、手跡は読み切れていない。博雅の教えを俟つ。



兼好法师

日本兼好法师是一个很有意思的和尚深通儒释黄老的道理，富于人情，仿佛近于颜黄门。所著有徒然草一卷，凡二百四十三节，其第五节云：〝有不幸遇到忧悲的人，不必即剃发出家，到不如若存若亡的闭着门，则无期待的过日子更为适宜。显基中纳言曾云，愿得无罪而赏谪居之月，其言至有味。〟因仿其意为加一语云，愿得无罪而登断头台。此意实肇始于三一八时（一）（一九二六年），其时死者北大有法科胡锡爵君，在学校给他开追悼会的时候，我送去一副挽联，词曰，〝什么世界，还讲爱国？如此死法，抵得成仙。〟随后

兼好法師

日本の兼好法師は面白い和尚で深く儒・釈・道の道理に通じていて、人情に富み、顔黄門之推に近いようだ。著したものは『徒然草』一巻、全二百四十三節がある。その第五節に言う、

「不幸に愁に沈める人の、頭おろしなど、ふつつかに思ひとりたるにはあらで、あるかなきかに門さしこめて、待つこともなく明かし暮らしたる、さるかたにあらまほしき。顕基中納言のいひけん、配所の月、罪なくして見ん事、さも覚えぬべし。」

その意に倣って一語を付け加えるならば、願わくば罪なくして断頭台に上るを得んことを。この心構えは実は三一八の時（一）（一九二六年）に始まる、その時の死者に北大では法科の胡錫爵君がある、学校で彼のために追悼会を開いたとき、わたしは一幅の挽聯を送った、その詞に言う、〝何という世界、まだ愛国を言うのか。かくの如き死法（しにかた）は、仙と成るに抵得（あた）る。〟その後

【注】

（一）三一八事件　一九二六年三月十八日、八国通牒（実質的には日本の干渉）に反対する国民大会に参集した請願団が段祺瑞執政府前で軍警の発砲を受け四十七名の死者と二百人余りの負傷者を出した。魯迅の言う「民国以来最も暗い日」である。

我就写了一篇□死法□(2)，发挥这个意义，表面是模仿俳文，实际的意思却是很郑重的。就只是这件事很难办，难道是可以请愿去得来的麽？因为天下事实在有些是矛盾的，人希望求生活是绝不容易，可是求死也是一样的难呵。七，十一，

わたしは一篇「死ぬ方法」(2)というのを書き、この意味を明らかにした、表面は俳文を真似ているけれど、実際の意味はとても重い。ただこういう事はとてもやりにくい、まさか請願をやって死を実現するというわけのものでもなかろう。天下の事は実際かなり矛盾したものであるから、人間が生きていこうと希望することはとても容易ではない、しかし死のうとするのも同じように難しい。七月十一日。

【注】

(2)「死ぬ方法」　『澤瀉集』『知堂文集』に収録。松枝茂夫氏『周作人随筆集』に日本語訳文がある。拙訳も『颱風の会』ホームページの資料庫にある。

越缦日记

越缦堂日记(1)有时写呆纪事作文，颇有佳趣。偶见其同治五年三月二十四日云，饮烧酒，以鸡觳佐之，味大佳。鸡觳取伏卵之未出者，毛骨半具，胚胎尚浑，越俗称〔呼〕为喜蛋，与樱笋並美一时，而他处鲜〔尠〕知取食者，又二十八日云，食樱桃鸡胎，樱桃老矣，味甘而渐败，鸡胎香美，风味佳于蒸豚。又四月初八日云，东坡诗云，微

越縵堂の日記

越縵堂の日記(1)はときどきとんでもない紀事作文を書くが、とてもおもしろい趣がある。偶然その同治五年三月二十四日を見ると、それには言う、「白酒(バイジウ)を飲むのに、鶏觳(けいこう)を酒の肴にすると、とても旨い。鶏觳は抱いた卵から雛が出る前のものを取るから、毛と骨が半ばそろっていて、胚胎はまだ見分けがつかない、紹興の習俗ではこれを喜蛋と称し、桜笋とともに旬の美味であるが、他所では取って食べることを知るものが少ない。」又二十八日には言う、「桜桃と鶏胎を食べるには、桜桃が熟れて、味が甘く漸く酸っぱくなるころに、鶏胎と合わせると香美で、風味は蒸豚よりも良い。」又〔七年〕四月八日には言う、「蘇東坡の詩に、微

【注】

(1)『越縵堂日記』　この部分は文末に改めて示す。



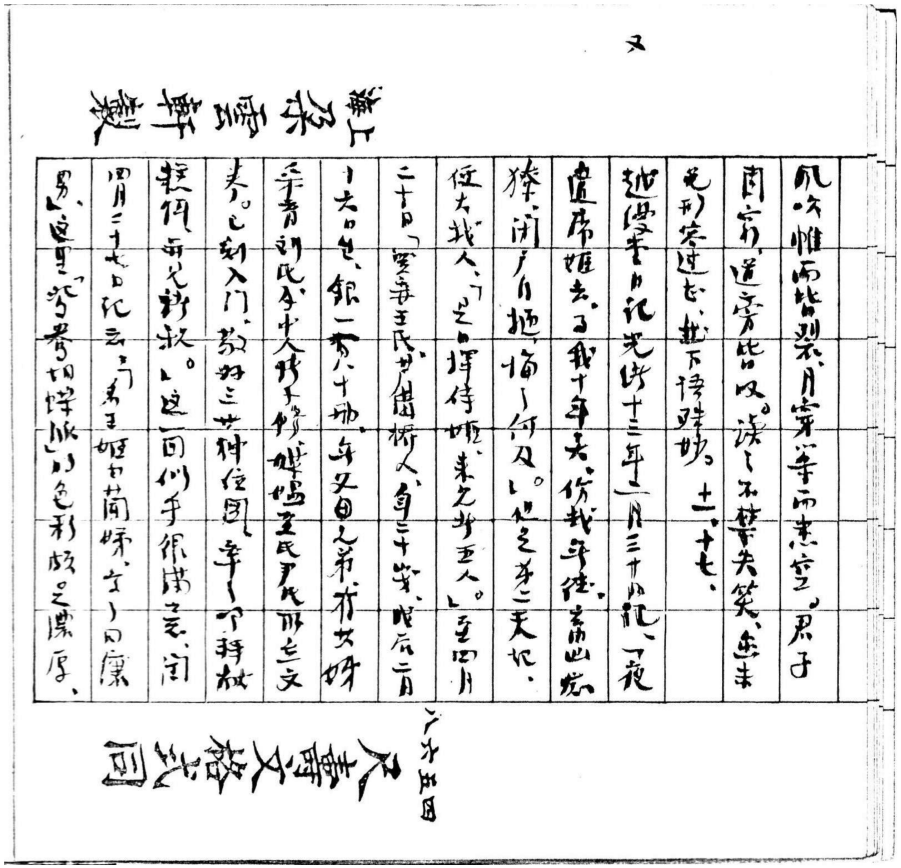
雨止还作，小窗幽且妍，盆山不见日，草木亦苍然。赵德麟谓非亲至吴越四五月之间，不知四语之妙。予谓虽生长吴越者，不特不能作此等言语，并亦〔求〕领会如德麟者亦不可得，此自非有雅人深致，不能解也。其描写穷居状况者，利用駢偶，亦有绝妙者，如七年六月初九日夜，纪其偕姬人自西郭移居锦鱗桥下黄花衕，云小舟一灯，破篋数卷，主人之面，瘦如削瓜，侍姬之鬢，乱于历稞（2）。倚身一襆，入霉欲斑，传家片毡，与蠹俱从。病仆偻背，傭婢出胸。横庚箸柴，丁倒盆盎。折足之几，半罣积尘，缺耳之铛，尚余焦饭。

〝微雨は止むかと思うとまた降る、小窓を通してみる景色は幽にしてしかも美しい、盆景は日を見ず、そこの草木も青々としている。〟趙徳麟は自分で四五月のころ呉越に行ったものでない限り、四句の良さは分からないと言う。わたしは呉越に成長したものであるけれども、こうした言葉を吐けないばかりか、徳麟のように領会することもできない、これは雅人の深く大きな心を持つものでなければ、理解できないのである。」その窮居の情況を描写するのに、駢文と偈句を利用して、又絶妙なものがある。たとえば七年六月九日の夜、彼が妾とともに西郭から住居を錦鱗橋下の黄花衕に移すことを記して、言う、「引越しの小舟には灯が一つ、ぼろ行李に本が数巻、主人の面は、痩せて瓜を削るが如く、侍姫のわげは、麦の穂よりも乱れ、身に着ける一張羅の袴は、梅雨に入って黴が生える始末、伝家の毛氈は、虫食いの虫と一緒に持ってきた。病気の従僕は背が曲がり、使っている婢は鳩胸ときた。薪の柴や竹は乱雑に、盆や盥はひっくり返り。足の折れた机は、半ば塵が積もったまま。取っ手の欠けた釜には、まだ焦げ飯が残っている。

【注】

（2）歴稞　乱れた麦の穂？未詳。

又



上海張雲軒製

凡吹帷而皆裂、月穿窗而悉空。君子
固窮、道旁皆以。淡之不禁失笑、忽未
免形容過甚、然下語殊妙。十一、十七、
越漫堂日記光緒十三年二月三十日記、「夜
遣席姬去、爲我十年矣、仿我年往、畜山炫
獠、閉戶自撫、悔之何及。」他之第二天記、
位大我人、「是日揮侍姬、來允者五人。」至四月
二十日「寶安王氏、世僑橋人、年二十歲、戊辰二月
十六日生、銀一百八十兩、年父母之弟、有女姊
年青劉氏、年中人孫子修、媒媼王氏、尹氏所立文
夫。」刻入門、敬好三世神位圖、幸之即拜獻
粧奩、無免新歡。」這一回似乎很滿意、閏
四月二十七日記云、「名王姬曰蘭姊、字之曰廉
男。」這是「鴛鴦切蝶派」的色彩頗足濃厚、

凡壽文格式圖

风吹帷而皆裂，月穿箓(3)而悉空。君子固穷，道旁皆歎。读之不禁失笑，虽未免形容过甚，然下语殊妙。十一，十七，

風がカーテンを吹いてみな裂け、月は貼ってある御札の穴(3)から差し込み悉くが空しい。君子固より窮す、道旁みな嘆息す。」これを読んで失笑を禁じ得ず、形容があまりに過多であることは免れないけれども、言葉遣いはとりわけうまい。十一月十七日。

【注】

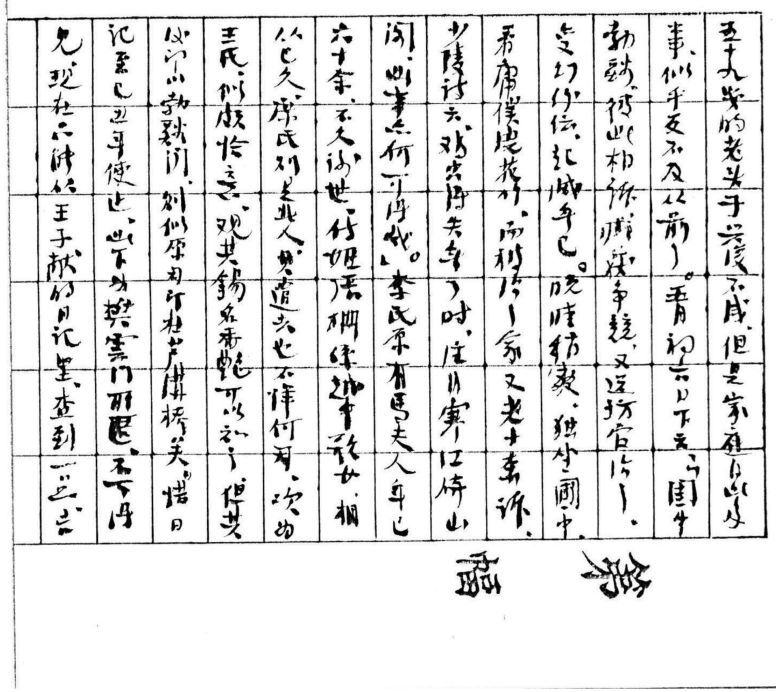
(3)箓すなわち籙、次の文に出る「硃符」と同じような道教などの符籙である。絵が描いてある場合もあり、全体としてかなり大きなものである。それが古くなって穴でも開いているのであろうか。ここ未詳。

又

越缦堂日记光绪十三年二月三十日记，「夜遣席姬去，事我十年矣，伤哉无德，畜此痴獠，闭户自撾，悔之何及。」但是第二天记，便大找人，「是日择侍姬，来见者五人。」至四月二十日，「买妾王氏，芦沟桥人，年二十岁，戊辰二月十六日生，银一百八十两，无父母兄弟，有其姊采育刘氏，及中人张子修，媒媪夏氏伊氏所立文券。已刻入门，敬县三世神位图率之叩〔句口支〕拜献糕饵，亦〔並〕见诸亲。」这一回似乎很满意，闰四月二十七日记云，「名王姬曰兰娣，字之曰纕男」这里〝鴛鴦蝴蝶派〟的色彩颇是浓厚，

又

越縵堂日記の光緒十三年二月三十日にはこう記す。「妾の席を追っ払う、我に仕えること十年、傷ましいかな徳のないこと、こんな畜生を養っていたとは。戸を閉め自分で自分を殴っても、後悔どうして追いつこうぞ。」しかし二日目にはこう記す。さかんに人を探して、「この日妾を選ぶ、会いに来たものは五人。」四月の二十日になると、「妾王氏を買う、盧溝橋の人、年は二十、戊辰二月十八日生まれ、銀百八十両、父母兄弟なく、劉氏に育てられた姉がある、それに周旋人の張子修、取り持ち女の夏氏と尹氏が立てた証書がある。巳の刻（午前十時）に家門を入り、掛けられた三世の神位図を敬意を表するためにこれを率いて叩頭の拝を行い餅の類を供え、また親族たちに会った。」今度は満足したらしく、閏四月二十七日には次のように記す。「王氏に名付けて蘭娣と言い、字して纕男と言う。」ここでは〝鴛鴦胡蝶派〟の色彩が濃厚で、



五十九岁的老头子兴复不浅，但是家庭自此多事，似乎反不及从前了。五月初六日下云，「闺中勃谿，彼此相诉，臧获争竞，又送坊官治之。变幻纷纭，起灭无已。晚晴〔殊〕稍爽，独坐圃中，倚阑看庸仆浇花竹，而被治之家又老小奔诉，少陵诗云，鸡虫得失无了时，注目寒江倚山阁，此事亦何可得哉。」李氏原有马夫人年已六十余，不久谢世，侍姬张珊係越中歌女，相从已久，席氏则是北人，其遣去也不详何因，次为王氏，似颇恰意，观其锡名香艳可以知之，但其后即以勃谿间，则似原因即在卢沟桥关。惜日记至己丑年便止，此下为樊云门*所匿，不可得见，现在只能从王子献的日记里，查到一点，吉

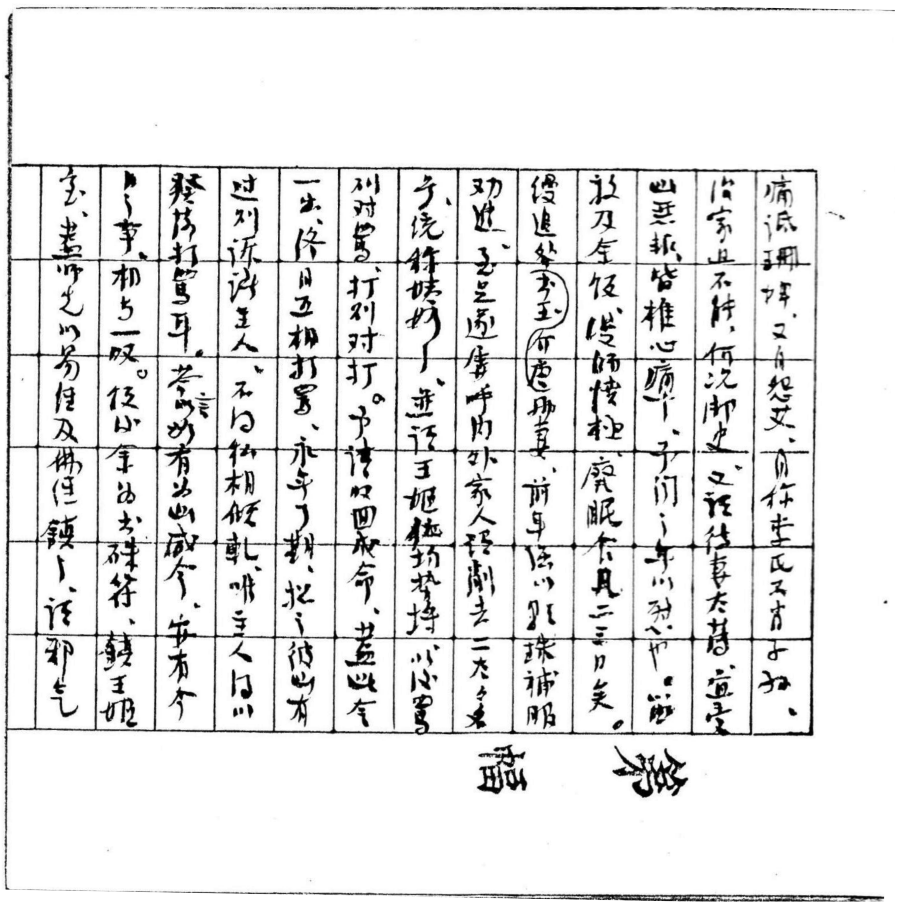
五十九歳の親爺にしてはなかなか意気が上がっている、しかし家庭はこれより多事となり、却って以前に及ばなくなったようである。五月六日の項に言う、「女どもが反目しあって、訴え合い、その婢たちも争うので、又番所に送り懲らしめてもらう。あれこれ手を変え品を変え、ごたごたが絶えず、已む時がない。夕方には晴れてやや爽快、ひとり庭に坐っていて、欄干によって下僕が花や竹に水をやっているのを見ていると、懲らしめにあった家では又老いも若きも争って訴えてくる。少陵の詩に、鶏虫の得失（くだらない得失をああだこうだと言って争う）は了わる時なく、目を寒江に注ぎ山閣に倚ると言うが、この事はまたどうして解決できようか。」李氏にはもともと馬夫人があって六十幾つだったが、しばらく前に世を去って、妾の張珊は紹興の歌姫で、長らく添っている、席氏は北方の人だが、追い払われたのは、何が原因なのか分からない、ついでは王氏だが、ずいぶん気に入っていたことは、あだな名前を付けたのを見ても分かる、だがその後妾同士のいがみ合いで溝ができたが、その原因はどうも盧溝橋（王氏）と関係するらしい。残念ながら日記は己丑の年（一八八九）になって終わっている。これ以下は樊雲門*がかくして、見ることができない。いまはただ王子献の日記から探すしかないが、

【注】

＊樊雲門　樊増祥（一八四六～一九三一）、湖北恩施の人、字は嘉父、雲門は号、樊山は別号。護理両江総督、袁世凱政府の顧問。李慈銘に師事し、同光派の重要詩人となる。なぜ『越縵堂日記』の己丑以後を隠したのか、その後隠された日記が出てきたのかどうかは未詳。

光片羽，也可以珍重的了。子献是他的得意弟子，但是没有什么成就，只留有几十册日记，帰北京大学図书馆收存，写在大片的文书紙上，不记什么学问读书的事，只有每日拜客见客，吃饭吃莲子，喝酒抽烟，看他的鸦片烟还是大瘾，往往迟延一刻就露出十分狼狈的样子来。但这里面却记着越缦的逸事，而且写得很是直率，曾抄出一部分来。其日记是光绪庚寅（一八九〇）这十年分，却忘记是哪一年了，在六月十六日条下云，夜方与敦夫饮，忽得越缦与敦片，言獠婢猖獗，深愧治家无法。十七日条下云，上午偕敦夫步至越缦堂，视其家变，延入内室坐定，缦师大声怒詈，备述昨夜王姬自缢幸已救治，

少しでも探し出せたら、宝物の断簡零墨で、とても珍重すべきものである。子献は彼の得意の弟子だが、何の成績もなく、ただ何十冊かの日記を残しただけである。それは北京大学図書館の収蔵するところとなった、大きな文書紙に書いてあり、学問読書の事など何もなく、ただ毎日客に会いに行ったとか来る客に会ったとか、食事をしたとか蓮の実を食べたとか、酒を飲んでアヘンを吸ったとかばかりで、彼のアヘン中毒はやっぱり重篤で、往々にして少し長引くと散々な体たらくとなる。だがここには越縵の逸事が書かれていて、しかもとても率直に書いてあり、かつて一部を書き写したことがある。その日記は光緒庚寅（一八九〇）からこの十年の分で、どの年かは忘れたが、六月十六日の条に次のように言う、「夜さり敦夫と飲んでいると、突然越縵が敦夫に与えた書付けがきた、野蛮な婢どもが猖獗し、家を治めようがないことを深く愧ずとあった。」十七日の条には、「午前中敦夫と一緒に歩いて越縵堂に行って、その家の変事を見る、内室に招き入れられて座が定まると、縵先生は大声で怒鳴りながら、昨夜王姫が自ら首を吊ったが、幸いもう救われたことの次第を詳しく述べられ、



痛诋珊婢，又自怨艾，自称李氏不肖子孙，治家且不能，何况御史，又谓待妻太薄，宜受此恶报，皆椎心痛言，予闻之无以慰也。留敦及余饭，缦师愤极，废眠食凡二三日矣。缦追咎介唐，书玉两妻，前年强以縣珠补服劝进，至是遂屡呼内外家人谓削去二太太名号，统称姨奶了，并谓王姬犹均势埒，以后骂则对骂，打则对打。予请收回威命，盖此令一出，终日互相打骂，永无了期，捴之彼此有过则诉诸主人，不得私相倾轧，唯主人得以发落打骂耳，答言如有为此威令，安有今日之事，相与一叹。饭后余为书硃符，镇王姬室，盖师先以易经及佛经镇了，谓邪气

張珊の婢を痛罵し、又自ら反省し自ら改めて、自ら李氏不肖の子孫と称し、家を治めることすらできず、ましていわんや御史の職をやと。又本妻に対してはあまりに薄情であったので、この悪の報いを受けるのは当然だとも。みな心を打つ痛言で、わたしはそれを聞いて慰めようもなかった。敦とわたしを食事に引き留められた、縵先生は憤懣やるかたなく、睡眠と食を廃すること二三日に及んだ。縵先生は介唐・書玉の二人の妻が、前年に真珠を滋養剤として服用するよう強いて勧めた事をも咎められた。ここに至って何度も内外の家人を呼んでは二太太（妾）という名号をやめて、すべて姨奶と言うようにと言われた、そして王姫はなおみな以前と同じだ、これからは口げんかも殴り合いも対々だとも言われた。わたしは命令を取り消すようにと言った。けだしこの厳命がひとたび出るや、終日互いに罵り殴り合って、いつまでも終わる時がないだろう、要するにお互いに過ちがあれば主人に訴える、私事で互いに押しのけあってはならない、ただ主人だけがけんかを始末できると。答えはもしこの命令が行われていたなら、どうして今日のような事があったろうかというもので、互いに嘆息した。食事の後わたしは御札（おふだ）を書いてやり、王姫の部屋を鎮めた。けだし先生は先に『易』と佛経とで鎮められたが、邪気は

未净，夜颇惴惴，承侯强欲留客陪之。原文甚长，唯字甚草草，不易辨认，故只抄其上半，甚可惜也，　十一，二十四，

まだ払われていないと思ったからである。夜はすこぶるびくびくものであったから、強いて客を留めて相手をさせようとされるのを承諾した。」原文ははなはだ長く、文字もはなはだ乱雑で、分かりにくいので、その上半分だけしか書きぬけなかったのは、はなはだ残念である。十一月廿四日。

消遣

近日因无新书可看〔1〕，没有消闲的方法，不得已而看自己的著作，发现了这是一个好法子。以自己的著作消遣，难道没有炒冷饭的味道么？这却是没有，而且觉得颇有意思，有时还感觉这还写得不错。因为我从前是这个主意，立定宗旨只说实话，而这实话多少年后也不见得有改变的，所以到这时候意见也没有什么改进。但是觉得自己从前的文章有些还不错，这也挹是够落后的了。又有一个法子，是以工作为消

暇つぶし

近ごろは見るべき新書がなくて〔1〕暇つぶしの方法がなく、やむを得ず自分の著作を読んでみて、これがいい方法だと発見した。自分の著作で暇つぶしをするなどとは、冷や飯を炒めるという気味があるのではないか。ところがそれがないのである。しかもすこぶる面白い、時にはこれはなかなかうまく書けていると思うことさえある。わたしは以前次のような考えだった、ただほんとうのことを言うだけだという宗旨を立てる、そしてこのほんとうのことは、何年か経ってもそれほど変わるものでもないだろうと、それで今になっても意見には何の変りもない。しかし自分の以前の文章がなかなかうまく書けていると感じるのは、これは要するに十分落後しているということだろう。もう一つの方法は、仕事を暇つぶしに

【注】

〔1〕見るべき新書　当時は文化大革命に入ろうとしていた時期で、出版機構はほとんど停止状態となり、出されるのは『毛主席語録』一色となった。ほとんど想像することさえできない情況であった。

遺。这是新近所学会的，倒也颇可以
使得。我这工作乃是翻译，目下所做
的在韩日本中世小说"平家物语"的工
作。这平家物语在日本文学上的位置，
好像是中国的三国志，而佳胜则过之，作
者不详，但据古世纪的上半的兼续法师
所述"德兰苹"所说，说信隆前刊行
长所作，"考的山中"隆之子，"隆的事
情在"平家物语"卷三中号有一章，记其
大写。然则著者对於所说的时代隔的还
不很远，所以虽是演义，但描写事实
並不是全退靈構，虽然有些華作者诗
大的地方亦是不免。在这一点上觉得有

遣。这是新进所学会的，倒也颇可以使得。我这工作乃是翻译，目下所做的在幹日本中世小说〝平家物语〟的工作。这平家物语在日本文学上的位置，好像是中国的三国志，而佳胜则过之，作者不详，但据十四世纪的上半的兼好法师所著〝徒然草〟所说，说信浓前司行长(2)所作，行长为山中行隆之子，行隆的事情在〝平家物语〟卷三中曾有一章，记其大略。然则著者对于所说的时代隔得还不很远，所以虽是演义，但描写事实并不是全凭虚构，虽然有些华饰与夸大的地方原是不免。在这一点上觉得与

することである。これは新たに学んだことだが、すこぶる使い物になる。わたしのこの仕事とはつまり翻訳である。目下やっているのは、日本の中世の小説『平家物語』をやる仕事である。この『平家物語』の日本文学上の位置は、中国の『三国志』〔演義〕のようだが、好さはこれに勝る。作者は不詳だが、十四世紀の前半の兼好法師が書いた『徒然草』に言うところによると、信濃の前司行長(2)の作る所だと言う、行長は山中行隆の息子で、行隆のことは『平家物語』巻三の中に一章があり、その大略を記している。ならば著者は語る時代とそれほど遠くは離れていない、だから演義ではあるけれども、描かれた事実は決して全くの虚構ではない、修飾や誇張したところがいくらかあるのは免れないにしても。この点で

【注】

(2)信濃の前司行長　『徒然草』第二百二十六段に見える。その父行隆のことは『平家物語』巻三第十七章に見える。その説とは別に行隆の父、中山中納言顕時の孫である葉室時長（行長とは孫同士）が編者であるとの説もあるが、いずれも実証的資料を欠くと言う。

三国演义似乎很有优长了。而且它的艺术工夫著实不错，有幾章实在令人感动，或者会心微笑，如卷四里边的信連与竞各章，所以在译述着的时候一面也是一种娱乐，可以作消遣。可是一卷译了，略为休息几天，便一时懒得提起笔起来，继续工作，那时只好看自己的笔记，或者读日本人做的童话。近日找到一个人，所作与安徒生虽是不一路，却很有意思。这人便是滨田广介，他所写的特别是给幼儿看的那些童话，专门写小孩子的幻想世界，似乎都有安徒生〝一荚五颗豆〟的意思，这是怪好玩的。有些人在童话里寄托些意思

『三国演義』よりもずっと優れているように思われる。そしてその芸術的手腕は確実に勝れ、何章かは実に人を感動させるか、あるいは会心の笑みをもたらす、たとえば巻四の信連と競の各章など、だから訳述する時は一方ではやはり一種の娯楽であって、暇つぶしということができる。しかし一巻が終わると、だいたいが何日か休むから、急に筆を執って仕事を続ける気がしない、その時には自分の小品を読むしかない、あるいは日本人の書いた童話を読むのである。近ごろ一人を見つけた、書くものはアンデルセンと道は違うけれども、なかなか面白い。それは浜田広介である。彼が書いたもの特に幼児に見せる童話は、もっぱら子どもの幻想世界を書いたものは、みなアンデルセンの「五粒のえんどう」の意味を持っているようだが、これがとてつもなく面白い。童話の中にそういう意味を込めると



印是教训，而他的作品列似乎重在没有意思，这一点是别人都不能及的，或并可以和他相比的，只有一个讲爱丽思的加梁耳吧。六六、一、九、

徐谋先生：降在荒芜人寄示在展望上所带来的关於曲塑来的大文，关於部人的批评，宽和年恕，自未曾有，至为钦佩。但有一点，印以"道家之事功化"之为说，自己的文章，列微有错误。此与"偏陋之自由化"相互，为我文章的主持，说句老实话，也是一种空论罢了。我对於自己的行为向取，不辩解主义，在"革命什么"中有一两个章中的出现，曲塑来中印实行之。但是对於先生，不妨

[illegible]

即是教训，而他的作品则似专重在很有意思，这一点是别人都不能及的，或者可以和他相比的，只有一个讲爱丽思的加乐耳吧。六六，一，九，

そのまま教訓になってしまうことが多いのだが、彼の作品はもっぱら面白いということに重点をおいているようで、この点はほかの人はみな彼に及ばない、あるいは彼と比べられるのは、ただ一人アリスを語ったキャロルだけである。六十六年一月九日。

致徐訏〔1〕书

徐訏先生：承在港友人寄示在『展望』上所发表的关于回想録的大文，关于鄙人的批评，宽和平恕，得未曾有，至为钦佩。但有一点，即以「道義之事功化」〔2〕一文为说明自己的文章，则微有错误。此与〝伦理之自然化〟相并，为我多年来的主张，说句老实话，也只是一种空论罢了。我对于自己的行为向取〝不辩解主义〟，在「药堂什文」中有一篇文章〔3〕申明此义，回想录中即实行之。但是对于先生，不妨

徐訏〔1〕への手紙

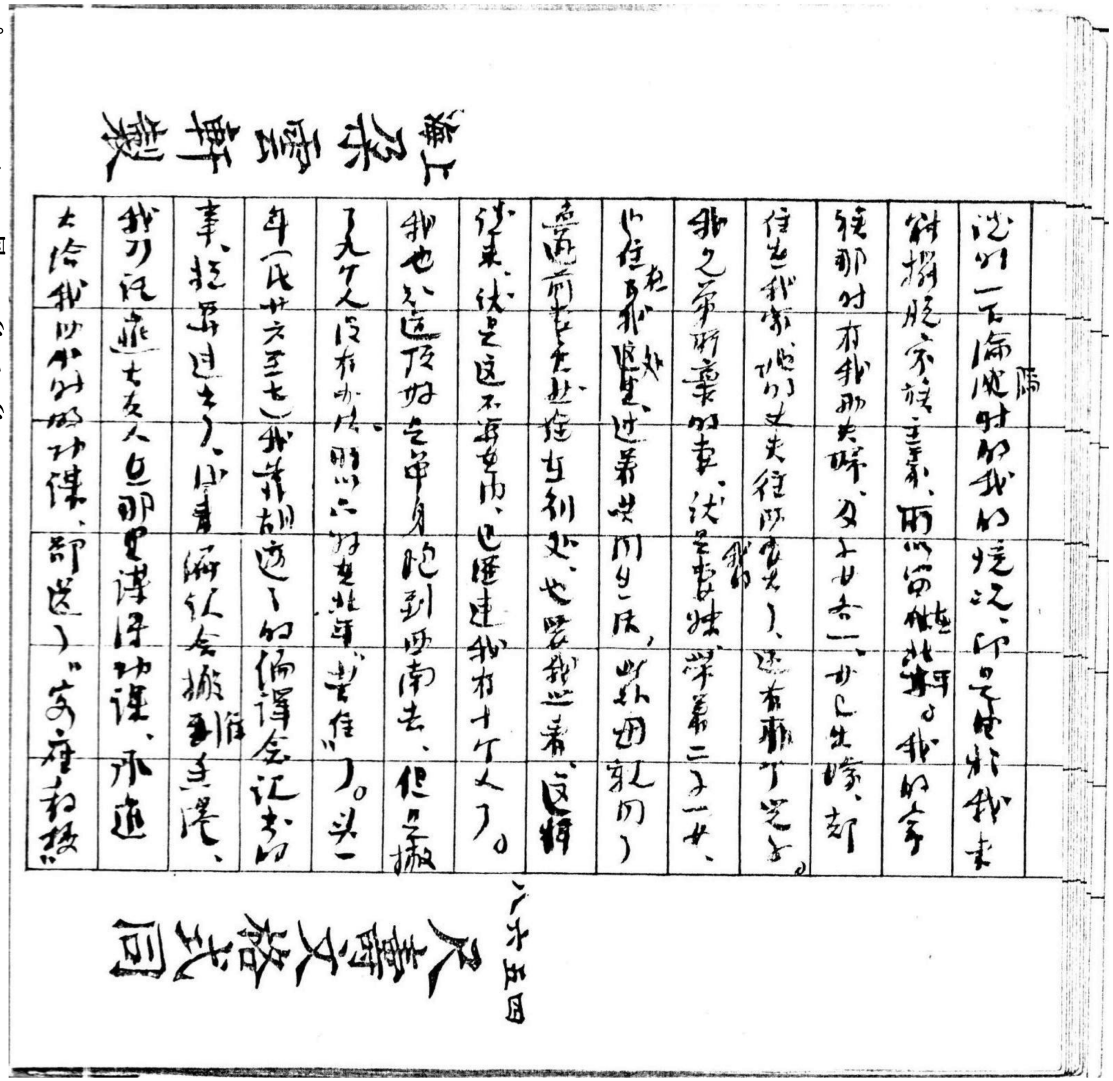
徐訏先生：

香港の友人から先生が『展望』に発表された回想録に関する大文を送ってくれました、わたくしについてのご批評の、寛大公平さは、未だかつてあらざるもので、欽佩の至りであります。ただ一点すなわち「道義の事功化」の一文〔2〕を自分を説明した文章だとされるのは、少し誤りがあります。これは〝倫理の自然化〟と相並ぶもので、わたしの年来の主張でして、ほんとうのことを言えば、一種の空論に過ぎません。わたしは自分の行為についてはずっと〝弁解しない主義〟を取ってきました。「薬堂什文」の中のある文章〔3〕でこの意味を釈明しました。『回想録』ではつまりこれを実行したわけです。しかし先生に対しては、

【注】

(1)徐訏　徐伯訏（一九〇八～一九八〇）、浙江慈溪の人。室名三思楼。ジャーナリスト、編集者、作家。上海で林語堂を助けて『論語』半月刊を編輯、後『人間世』半月刊の主編をやり、フランス、アメリカに渡る、一九四六年上海に帰り、一九五〇年香港に移る。詩集『四十詩綜』、小説もあり、台湾から『徐訏全集』十八冊が出版されたと言う。周作人のこの手紙は、彼が一九六七年に亡くなったので、早くもそれを察知した徐訏は自分が香港で出した雑誌『筆端』第一号（一九六八年一月）に載せた。それが黄開発編『知堂書信』（華夏出版社一九九五年一月）の最後に載せる一通である。ここに載せる一通とは多少の違いはあるが基本的には同一と認められる。

(2)「道義の事功化」　一九四五年十一月七日に書かれ、『知堂乙

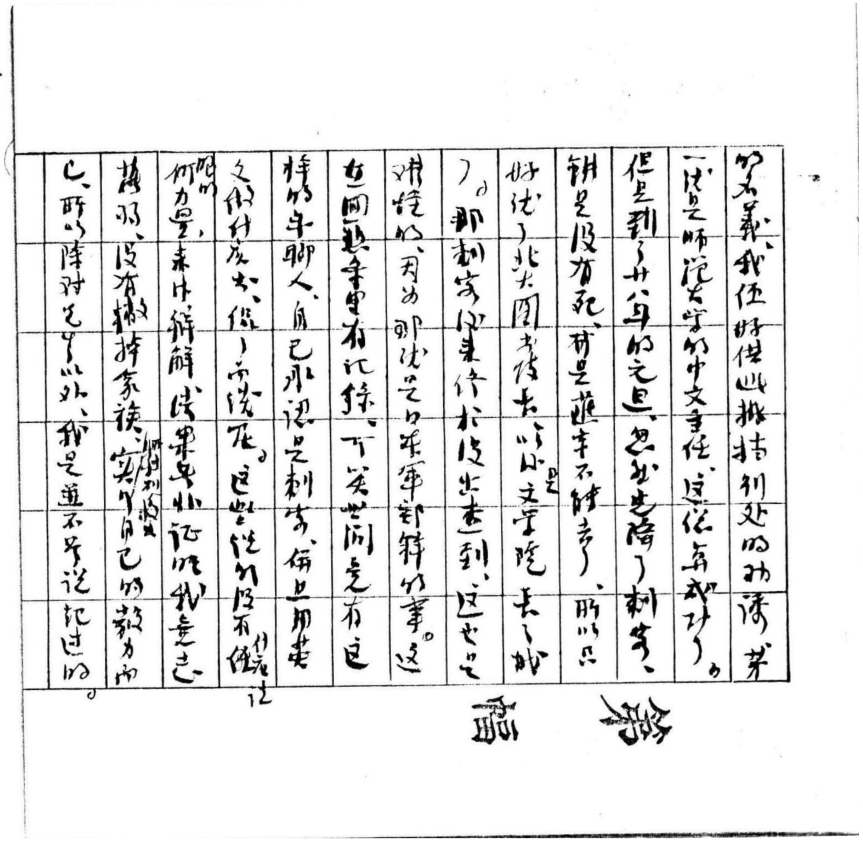


西文篇』に収録。

(3)「薬堂什文」のある文章『薬堂雑文』に収める「弁解」という文章。『回想録』は一四〇・一四一章の「弁解はせずの説」(上下)でのの記述を言う。

说明一下沦陷时的我的境况，即是由于我未能摆脱家族主义，所以留在北平。我的家族那时有我两夫妇，及子女各一，女已出嫁，却住在我家，她的丈夫往西安去了，还有两个儿子。我兄弟所弃的妻，就是我的妻妹，带着二子一女，也住在我处，过着共同生活，此外母亲同了鲁迅前妻虽然住在别处，也要我照看，这样说来，就是这不算在内，已经连我有十个人了。我也知道顶好是单身跑到西南去，但是搬了九个人没有办法，所以只好在北平〝苦住〃了。头一年（民二十六至二十七）我靠胡适之的编译会译书的事，捞算过去了，后来编译会搬往香港，我乃託燕大友人在那里谋得功课，承燕大给我四小时的功课，却送了〝客座教授〃

淪陥時期のわたしの情況を説明しても構わないでしょう。つまりわたしは家族主義を脱却できないために北平に留まりました。わたしの家族はそのころわたしたち夫婦と、それに子女がそれぞれ一人、娘はすでに嫁に行っていましたが、わたしのところに住んでいました、彼女の夫は西安へ行っており、それに二人の子どもがありました。わたしの兄弟が捨てた妻、つまりわたしの妻の妹ですが、二男一女を連れて、やはりわたしのところに住んで、共同生活を送っていました、この他母と魯迅の前妻は別のところに住んでいましたが、やはりわたしが面倒を見なければなりません。こうしてみますと、たとい二人を計算に入れなくとも、すでにわたしを入れて十人です。わたしも一番いいのは単身西南に行くことだということは知っていました、しかし九人をほったらかすには方法がなく、そのため北平に〝苦住〃するしかなかったのです。初めの一年（民国二十六から二十七まで）は、胡適の編訳会の訳書の仕事で、何とか凌ぎましたが、その後編訳会は香港に引っ越したので、わたしは燕京大学の友人に頼んでそこで授業を持とうとしました、燕大はわたしに四時間の授業をくれたうえに、〝客員教授〃という



的名义，我便好供此抵挡别处的劝诱，第一就是师范大学的中文主任，这总算成功了（4）。但是到了二十八年的元旦，忽然光降了刺客，虽是没有死，可是燕京不能去了，所以只好就了北大图书馆长，以后是文学院长之職了。那刺客后来终于没出查到，这也是难怪的，因为那就是日本军部幹的事。这在回想录（5）里有记录，可笑世间竟这样的无聊人，自己承认是刺客，併且用英文做什么书，侃侃而谈呢。这些说明没有什么说服的力量，未作辩解，结果无非证明我意志薄弱，没有撇掉家族，实行牺牲别人救出自己的毅力而已，所以除对先生以外，我是并不曾说起过的。

名義をくれましたので、わたしはちょうどそれを名分にして他からの勧誘を断りました、第一は師範大学の中文系主任でしたが、それは成功したと言えるでしょう（4）。ところが二十八年の元旦になって、突然刺客が天下り、死ななかったけれども、燕京には行けなくなりました。だから北大の図書館長に、それから文学院長の職に就くしかなかったのです。その刺客は結局分からなかったのですが、それも無理はありません。それは日本軍部がやった事なのですから。これは『回想録』（5）にも記録がありますが、可笑しなことに世の中にはくだらぬ人がいるものです、自分から刺客だと認め、しかも英語で本など書いて、侃々諤々と談じています。そうした説明は何の説得力もありません、弁解はしなくとも、結果はわたしの意志薄弱を証明したに他なりません、家族をほったらかして、ほかの人間を犠牲にして自分を救出する気迫がなかったのです。だから先生以外に、わたしは決して話したことがありません。

【注】

（4）師範大学　国立北京師範大学。国立の大学は日本占領下ではすべて中国側からすれば偽○○大学となり、そこの教員は漢奸（売国奴）たることを疑われることとなる。成功したと言うのは任用辞退を言う。北京大学図書館長も院長も同様で偽職となった。それに対して輔仁大学はミッション系の私立であったから「偽」とはならない。

（5）『回想録』　『知堂回想録』巻四第一七七節「元旦の刺客」。

| | | |

但是我也并不后悔，不但是后悔无济于事，而且现在这十多年，得以安静译书，也是我以前未曾有过的境遇。以前以教书为职业，翻译的工作没有工夫做，现今便工作与职业合一了，我好久计划訳読的书于今才得实现，即如希腊人路吉阿诺斯的对话二十篇，捴计有四十多万字，这乃是我四十年来的心愿，去年总算完成了。虽然何时能够出板，目下还不能说，捴之我心愿已经完成，对于那位后汉末年的希腊作家也尽了介绍之职了。我于先生只于解放那一年夏天，在金星屋〔6〕席上见过一次面，没有详谈的机会，所以不能算做未识面的友人，草草写这书信，幸祈监察，併望勿引用发表，则幸甚矣。　二，一〇

しかしわたしはやはり後悔はしていません。後悔は事に役に立たないばかりか、現在この十何年かは、落ち着いて翻訳ができたのは、やはり以前にはなかった境遇です。以前は教師が職業でしたので、翻訳の仕事はする暇がありませんでした、今では仕事と職業が一致しています。ギリシア人ルキアノスの『対話二十篇』、総計四十四万字など、これはわたしの四十年来の悲願でしたが、去年何とか完成しました。何時出版できるかは、目下のところ言えませんが、要するに私の悲願はすでに成就したのです。あの後漢末のギリシアの作家にも紹介の実は尽くしました。わたしは先生とはただ解放の年の夏に、金星屋〔6〕の席上で一度お目にかかっただけで、詳しくお話しする機会はありませんでしたが、したがって面識のない友人ということにはならないので、失礼ながらこの手紙を認めました。ご賢察を、ただどうか引用して発表なさらないでくだされば、幸甚です。

（一九六六年）二月十日。

【注】

〔6〕金星屋　金性堯（一九一六～？）、浙江定海の人。ジャーナリスト、編集者。金星屋はペンネームの一つ。有名なのが文載道、ほかに多くの筆名を持つ。日中戦争中は上海で『魯迅風』を王任叔とともに編集し、戦後は各出版社で編集をし、後に上海の中華書局に入った。

【注】（二十一頁に系ける）

（1）『越縵堂日記』　李慈銘の咸豊癸丑（一八五三）から光緒戊子（一八八八）までの日記。民国九年（一九二〇）に北京浙江公会なる所から日記の手稿が石印本で発行された。李慈銘は生前からその日記の一部を人に見せたりして世間に流伝しており、もともと見せるための日記なのだと言われたという挿話が伝わっており、周作人もしばしばその事に触れる。なお周作人が兄の魯迅とケンカ別れをした後、魯迅が八道湾に自分の書物を取りに戻って、そこであわや殴り合いになりそうなのをその場にいた人に止められたということがあった。その後魯迅が友人の許寿裳にその事を話したところ、彼は自分が進呈した『越縵堂日記』はどうしたと訊いた。それに対して魯迅は没収されたと答えた。その「没収された」日記をもとに、今ここで李慈銘の事が話題として取り上げられている。なお釈文中の〔　〕内は『越縵堂日記』の影印本に作る所である。李慈銘（一八三〇～一八九四）、字は愛伯、号は蕺客、尊客とも。又越縵老人とも称す。浙江会稽の人。思想的には保守派で中体西用の開明派に反対した。科挙に何度も失敗し、官界での活躍は思いのようには行かなかった。口の悪い放言癖でも知られた。その詩文集の近刊に上海古籍出版社『中国近代文学叢書』の『越縵堂文集』三冊（劉再華校点二〇〇八）がある。